百八町記

四

波 13
69
4

特
へ
69
4

百八町記巻第四

○あるふるく佛法ハ父母妻子兄弟と他人の父母
妻子兄弟とをわかつことなく一切を一子のごとく
愛し傷ものを同じやうに味ひ
事をもとめ我が父母妻子兄弟をも敬
そのごとくに他人の父母妻子兄弟をも敬
也これをおのれ自ら己親をもとめ敬ふ
ばかりでそこに愛敬をまし
ふ己親を愛敬をまし一とをしのまゝ
ふの意ばかりでなく佛法ハ

うの程とそく意を尽しんとすべし我が父母あるを見
とも教をなすまじきは仏人ともに
あづくわを教せることをしゆの中ふさを挙遠の程をも
づくうかまり仏法の慶深きうち大意大也ハ儒学
もんしやうのべきを称ごとくていふ儒の愚
痛めふの心ひきうち孫ごとくに我が父母
意のはあらんかぎりこれを尽の篇を挙
み兄弟のごとく他人私也のをも敬みて我が父母あの兄
弟ふくこと施て称ことのごとくうち寵をうしもあり
覚いうの思ハ仏よりも劣して厚薄同一の思ありやまた下
の雑ごうを悔よ仏のまごと狼そうでごとくあらやめ

いこまでの意よりあつどや俗儒ハまうの心をうしもあり
なぶふ日まで仏法と称ともうしもあり中ハ貪慾私情更遠ふ
そとなれ

○ある人いわく聖教の大仏恵ごとくます 福寿弘報まで
ともまうべ先くこわごとをもし福寿弘報ともいもく
あるまうのをうしてまうくさなる父母あるくきうち仏恵
人ともあり仏法よりかくふ仏恵ありやべうべ若そいうく仏
はう大意也ハ福寿弘報ともんのうべ大意大也ともを
の意中ふさやうのふ仏のうべ大意大也ともを福寿を
ハうまうこうりうをうしもあり仏恵ありやべうべ今出
戸中ハ会悪人ともよ福寿弘報ハいよあるべ出

ふ奥様のたまものことを維ゞ楠南しうへ
ととゝいなけまでごと伝傳文の意也ふすまを傳もうひ
今くよ初しき鳴一称名ーあうひ、経呪とう
色或を月日庚辛あんその代給あうひ、傳称はあわ
あひい雲信楊住書おのの結翰をを色経なごの神ひ
らき町くこ辻小路よやとうひ地祖をうその寺ふぶで
やそう帰人のうまも仏ごまで漢ご風女の罪苦うく海こはど
とと字油何と自練し注伝恵とうふことも仏うふ大意
方法の油唯とうを空色也経をひくきもうく町こ門
ちよとひくみの回りく学ぶで呵よこれをあくまでうこと
づうごやと績わけ或いふうよりそこいは油とあうもう

あんでく鳴まけびはを弁を翔り飛もうことを維の一機一撮
をわくへんかうふ法蘇のうあありとうりて地でごき死悪
そまづうく仏傷意仁のふ大小油蔵の理を合点ありふ
あうへいくく仏法い今きうりの河とあまいうの保期よそ
もりあると傷法いいまく河てくらびうふごあよそう一張あ
ー経作ーそもふ下方民んのまくご他く保善よなよ
つまあ一善そうくく何とそ傷学まい利ロうりうや傷
はつまいまご河いてくごとうあまま大意そ地めそごやに城
の大ふう下的町人よりくさうで心学ふうやうまさ
うんなるまま思いうまこはとて初のおりくうりう安の
おうりまをを酔ごとうへあうその門来て百へごや

さわまでに儒学の行ってくべく百年のひ
八国そう学校とそこそこる国家とする初乃至利乃そう接も
そう行きん遠きこまりうやうそうりうとそうくと日
なれ儒をみさうんそうまかそれ初ばくその益利ん
学校のこまりくべ国とれ学校儒をみ益利一字仁義の
補助のーまま開拓業をそ仁義法のこと
ばしめくとふのそうりてばんせそこそうくん儒義法の
儒者をんのべーし儒をまんの日ばまる仁まる
ーとそこもん自己のふ仁義とごこうくべ仁義法の仁
義に仁義とごこうくべをみづくわこるうとれ仁義法
のおうのやうのまおとう付の儒をまんまうくとまうど

をきばうなりまま民初秋父ふとうとうい深山里小
て頃年までに仕法を知るる国家とする乃至年休
男女のも民恒会和楽ふ利益のこまりめの魁父の仇を
とう仕法秋父乃山里小ゆきをとそこふ河豆乃お益民おくべく
ありてごがり後生大まくんおうまる春情あるけ
のんうまおまり自然乃まうとのづくまりうと
これをふうら仕法仁義乃お益民おくべく
らそまうり義おとう乃和楽乃日年ま儒法楽乃谷
年まばりてそせんおと非ら一人も仁義を情まー万民

の補佐ありや生徒ども歴代の帝王毎
り代々み将軍も勿論のもたなる一ちを知ほを悟り一
て天下を治るを治るものこと
万民仕ほとそうく油断一
ぬ事をもつて傷ぬ
勿義姫路城主一ツ
○わる人いつく仕ほ投胎純生異淫婦乃紀あり投
胎純生とハたとへこれを雑乃紀事のごとし生れ智
つとつゝまも異淫婦ハたとへ雑ごとく善
悪よりて生ずしうりやうの
よりさまれとつゝまんとやうの害紀ハ民

あどハたとへうくまを世先乃害をもつて
そふなどのちんさやうみ紀ちを
言ていくまづこも方ハ智恵
かうこく書を乃んでさつて
生異淫婦乃紀ちを作ごとみさうん
わるくいつくんのまるまつ支姫
よりまるいくんのぞ母乃胎内へ
馬いる。牛ハ牛とて支生ものと
しる牛のうて人と寿ハまをつ
大ちうつ内ちうあるどや善ちん報ハ
るごと支智ちん ふ支智人申

吟もと我小智にて足縁とさかりまでハなど縁なるにはさあ
らハ汝が胎孕と為して愚情を熟し妄念と生治せ
ひ人ありて生ずる事夫婦交会ありハ夫婦和合によつてなるま
てなるべき人ありしハ何事ぞこちへ風気の人一歳にあまれ
子なけれバ和きさの薪とりしれまでいまでも子なき
人ありその人無病にて血気充満の男女ありしハ
くいえん何となバ投胎托生ハ因縁に此因縁よわりの因因と
云ハその人無宿業なり前縁とてふハ夫婦也二人の因因
宿業と外縁夫婦と和合して子を生ずる因因の縁乃一
すと欠てハ子なし其のいれハ前縁の夫婦ありまでど也同
因乃宿業なけれバ胎よ入の子なしい胎よ入乃子ありても

外縁の夫婦なけれバ神とうけへきよすくところなりがたし
よりしめ入無き胎なし又へ夫婦するなり父母也に父ハ
陽ありて母ハ陰ハよく母ハ陰あって出のごとく子ハ五穀の種の
ごとし陽気ありても陰気なければ中ぶくべき所なし陰気ばかり
てハ陽気なけれバ神とすへきようすへしかるがゆへ
父の精ハ白き骨となり母の精ハ赤き肉となるといへり
陽気陰気あつても種なければ何のせんもなき理とさとるべく
夫婦ありても子なき理と合点すべし何ごとの外
にわ来るも胎によつてむすぶ其の理さとる人ハ因縁和合
前縁深縁より業悪を作ことし英宗家乃言より
里老さハ数ハ此ゆへの種々寄よ記の書ごとるさぞ後乃つかさ

又古歌よ漏脇の梅花自ことうるよ書とあうかやうの物
の平家物語うて乃のべ花多つけまいふよりあくまる
りあ〜かうぐあよ書せざ無ござつて頃登りあ〜唯同風よ
ばど〜り和と自のよやもりでこの仁勇紀よ神宝あれ形ちる
ケ乃理合話をべ〜こ乃仁勇
も書あくまるして宮乗の脇関へり松とへ也花そ乃
そとへをうくあをて毎脇ハ多あるまるあのこと神織そ
人書とし人うくまるまをとうちん家をとうちう脇
御の理やあるへ日く家ハひろ脇ハせざ〜いそで神織
免とのまあこをむ書そっくく神織ハ会あり多あれ
ハ大うちんべて花うを漏わう　とうんば多へも也

かうあよ脇関とせざとひうとをべこを
又り多の理やひくく又めぐつよあり人をまで馬る
とをべ異ご後梅物乃理あ
ありへの形ちいつまで一指をの百姓町人
備山所あんどくわる重いそ乃花ちかやも神織ま
たそのちう一同乃神織あれとを人脇よへてへ〜ふくさ
とうる服よへている花となる天花百物同花一称の
理合長をべ一秩乃性ハ同一多れとを種刀花通あんど
そ仁くよ松り出をば別花あり人会長あうや縄よ脇卵
漏化乃宮をありとつごをめ備書
とうむとのふするりとう備書と善嘆ハ宮脇をふ

こて右稷となりて皆秋に高卿と呑て談話をなり
おりひ伴事に家をかまふ生徒と
おりこくの傷就といふ日を
基をきてこさ寸寺生おりそ
自とふなる悪癖私見と活却し
の私告を度のつこうを也元下悪魔の目おとんごこと
て何ぞ浄土地ごくあることわそうや悪事妙全
基玉物をみてこらんよいかごうやこん談全の若意
出級をみてこらんよいかごうやこん現立の鼻さたる
くもんー私法よ過ぎー来勧の大吾をあるうへ

七

○あるくへつく傷書よ気質の
人くこうもそう私欲の起の私
天石石の私よおりびこうこ
ーなるとは法よい天石をそ
称ごひすとしこんこ生を来悪也吾て曰
生人の天石とのこまふいめふ多分
のの私也油唯とうこれの天石の
欲の心をこう人態いたくつごまで
うけおうるぞや生すおうらこ
私態三悪私悪のふもおうふ
要をこあこくの人氏を信非信みの私を。

ことを対とおこう天縁のあれるんよ皆なすこと祝てすう
ハてうの私怨私恩あるべどや仏しく大風雷雨おいこれ変
気とうんえその変気仍ることうと生教とを分善こと以
大天気うの御をバ天乙幸私怨恩私恩あるう
まり必ずあり私の古ことをうに大恩逆たう
の主君主幸以下の民おまことうに宗門をうに宗旨
宗うて西吾うりの人今の仏
だうあくとうく天乙うの西私
怨恩想私恩あるまりすおう
雷のし天ようれみき私恩あうあの気をみくうまう西よ
つまうりと先づさむうれで朝用の付世ハこと乙西気

節うう小法く湯武伊尹ありて天下を平
万民安あ也ふうに曲まあんでが何代いこと私恩あう
おうく廃如出そして天下乱一万民塗苦労
一也これで善うとうそを河あうふうく天気私
恩の節よおうとて始皇帝郡
気出そしてあうこうふうく宗
旨動転徒の善人おあり
西私とまてど書面字仏をうく
ううのあうま天よあくぶう私恩あうまの西あうと出も
一人ありまと祝うん天気邪
気超過皇統うと廃動手殿伝の末の災罪いそうべ

きそうへ天乃ゝ伝義のこゝろ
きつゝもうごきつゝて発
ちむてゝの主国郡乃ものゝ
百民みな模ゝにおゝゞ乃ゝ
安楽ゝそうせらるゝことをそ乃
但ゝ善のおゝきと云ゝ一ゝ
あるゝとゝ死ゝ報の何ありそ
○あるゝへゝゝゝゝ楽乃
ゝてゝゝを乱ゝ
ゝゝを唐土言ゝゝ愚痴乃
おゝゝ偽とゝゝ物とバ

そゝつゝもあるも佛ゝようふ
まゝろゝありそ乃一ゝ仏のたゝ
万ゝ善を成就をゝゞもそゝ
二ゝ仏乃大ゝゝ
無ゝを仏会をゆすけゝゞそ乃
情を深ゝとゝゝ
池が当ゝそ乃心懐ゝゝ乃口撫ゝ
のゞゝ佛書を見ゝま
と我ゝゞ書化をゝ
おゝゞゝゝ仏乃ゝ
いそんや我ゝゝとゝや

帝仏法を信用し給ひそれより天竺を招
きまねくべきよしを奏しければ仏法は漢の明帝
の時より流布ありまして明帝よりの帝王
を仏法のうちごとくを信じ
つとめ給ひしかども天竺の国家を破乱し
しまひそれより利益なく儒者の縁を設けんごと
くにて仇寇よりおこりて孔
子の門人ともの心入悪く仏滅後
五百年ごろに彼仏滅後
五百年ごろに論師ありて仏法を
迷国ありて各異なる
義を立て仏滅後
千年ごろに龍樹菩薩
出現して諸法皆空
の理を説き給ひ
ける時に
外道
悉く
降伏
して
仏法
に帰
依し
ける
ごと
く仏
滅後
一千
年ご
ろに
龍樹
菩薩
出現
して
諸法
皆空
の理
を説
き給
ひけ
る時
に外
道悉
く降
伏し
て仏
法に
帰依
しけ
るご
とく

きぞや吟美孤心こゝろ
乃ほ云い大儒ぬ白の智人
つ知そるにそるぶでろ
人の境あり〳〵あり郷里
親族とのひ大臣とのひいふぞや父帝一乃
仁法を行ひ〳〵国家をやすう給ふんとし
給ふ紀実をいつさん都と尚心よひ〳〵を経
をぬ生涯乃事情西家の寺僧ほどや多をとり
て武帝一の狐狸を宮東のうへぬをへべ一宮東
と尚果むむくひやそのもの
同あふ哀乃形をとりてを今色をべ一国果へ仏

和室漢をまあうまぬ法りび師しまそ君の教え新四貴
ぬ貴前の俄ぬあり〳〵ぬうこまふあうべる宮ひをを
つくまぬ乃むくひ西宮乃形を多和一現宝うのべ吾
をるそべ一吾西乃西新も氏をあがうび武帝仏法と
仁用わまでで悟をめぞかうび国仏事仏法宝のめ
あく狐狸あんとうべ一ぬる敵幹とを事をぎ
一事貴を西法をうわ西をのたもうこひのうをし
西ぬ西そうふをぬれつぬうをぬ一こ物く仏法を波
ぬうとを現西ぬをひくぬ男ともべ一ぬ
世乃事法とうつく西宝をぬ入山現世うて仏
仏波のちんぬそう功姫ぬうとて事世うのべ男とうう

とありやまたこれらの事柄のごときは実に稲荷の
たるありさまにありやまた我が国の実のり
やまとは紀元を作用あまたありひく違
慶応の西暦以来なりてより
ありて武帝一人のために阿
ため儒書をもちて乱すの経
とあり意ひろく人の命令ありて
ありや歴四経令ありて
色うくれ乱すのことなかれ天下治世万民のために
一人のごとくんぞ儒をもれど

そでの紀元をもとめてありそうてありそうこと
をの大元年ありぬことにおいて
を儒書の代より儒をもちて
と年始をろよ儒をもちて
を春秋をもちて
を祝をもちて
経のごとくふたりて
乙下の乱をもちて春秋のごとく
くひとりありやまたこれを
授命ありをもちて
ちくれいぶくくありて

とうとうとうとう不思議王菩薩に
そう仰せられました時に
法世の衆生と同様に
よう法華経をうけたもうべきことを
もまた信ずるや否や
唯今あなた様と
智慧あるよう同意して
始皇これより方士連を
の方訣をもってご覧
ここの経もの経文を
云何のごとき事を

仏のお出ましを待ち
ありこれ法華経
而も法華経
つく候
而も経
と勝んでご

私どもは仏法修行
般若を得
而も
大なる仏果
とうとう法華経

菩薩に
般若
法華経
仏法
法華経

理を淨土宗の元信と同じ
ものゝよし心眞宗信心の女は西方極樂
耶會と義ひして男子の
その神は女の生れかはりの
らせまぐ大勢女房ありなやむべくそ
のそこに男子ありすかうら男神法をそこかひ
なく候
○わが家の祖師と同く仏教黄檗下國乃住な
ま僧は出家中夏より出乃生民信用をこさまあくれる
乃絶ることを悲秋のこゝあるは結髪
いつく昔そう喪をとりて六ヶ月

[illegible]ばかりつゞゆゑ西行そ
まるでごとそつうも雑云ふ
ひとさて他法談あと遊宿
金玉のかざり無味酒あひ
とごろ西連あんでごとそこそ
触そこせめいまん先こそ
高僧ふくハそひ徳すふ
○あるへいそく金新陽玉ハたう
やはすでハたう神仙世ふもく
蚤あるとよとこ雑云ふ
おりかつがゆゑ生への書

八十二郎縄八方の座義とう
めまげ金玉ひとあるこ
らざう大意浅そのたう
出来とろうやまあとゆく
云子とう手をうてひりこと
外乱こそくまひおまるもの
ふおお秘西郎とまでて
あぞやふんをひの潮と望
ひ浅源庵様とまりて地又
あまそのあ下ををとりつく
とりふ死こえそうもりどと大

事非しあくとまつて合点せよ一生書物を誦ずあれハその
義理を深く穿く僅し仏書を探るものなれども理もあまねく
知る人なりしかうがゆへよそ乃学者の心理よ麁細あれ
こへハ大竜ハ池川よ居住をなし滄海よおそぶ両鰹ハ河
流のざを居ども海井ととゝうしあはされども一生書物りハ
現在天堂をあるも佛書ハ惣楽未来を説くて法家
乃理を知とらぐとをりて言ふおの儒をとやうの儒学
者ハやうやく宮口の文字のことをするくを仏法とわざ
歩きそしるかとり日蝠とんの時来法なる者ハ世乃利
慾さんなる者ハ大悟人ならさゆへ何の詮なさうしと附
節や従しめちつ何と行するも除ん欲するも仏法

乃こまりしこまのそとくハ一指と撰じて天をあらハかくさ
むとし堤をそらて海をうまんと欲するがごとし
私をつゝく佛書ハおあらくす儒書ハあやくあさとさわく
佛人生の苦悩をいたさむへからん教なる孔子そのよハ
ひと七八十歳まで卒しまんで以一生の中安居んまん
云りたがひよまなおわるべからんそ乃云りとあらん以て
乃西方善知と妍儒の理よ仮へし仏経とあるまさ
生らうへく八阿難目連迦葉舎那弗も儒経とあるの
されさるハ子張子夏冉求およ教なるの云りハ二身ん
て諸さんあるハ小流くあらし孔子の云りハ二ちまし乃
とヾれさる吾のことへひさうそさる小流くあらし孔子七十

こゝろて幸ひ給はれば淫書の災ひかゞるを
免うべし
○わろき人ありて悔ども矣てい
行ひで善くいつく佛書也ありとも
読ん経也乃ち必ず善てい
人いつく経法の人ありのほめんこと
ハ契よりまつく仏の月と乃つく汗
とをうごて大海と計ありとあら
ーて後う儒ありと知ねとべ
バ佛ありと知ねとべ乃書よりつく
ー法ハ佛ーと経ありと儒書よりつく

そう言ふまでもなれいねりうぶ
道乃書也ありつく主まの
と性ことのつまハ初て学ハ
とうつやう何ぬこりも多物
色ー儒ありとやうの物ありた
ドまも也の私乃道心ありぬ
てい法物経聖穂義合言ふ乃
う一衆の植ふ書とうん好ハ何
車を作りてもうぬがいよやう
あるふく植ふのいつく生涯の書
乃穂物やまこなよりあらひとぬ

車人輪ぐるめぬれあり一みこめ合点
をゆや皇祖大神ゆるさんと御告ありて
乃いりこ四角とぐるぐるんと強をだゆるし給へ今とまで前り
給へこゆをまこよ治むべ一流とをこりんろりめ嫩
さこるとぐるうりめ一お縄そうめ
ろぐ〳〵歌〳〵こ母こも私そのつ
皇宮ぐるんとこるまでくんと
とるまでとこんまむと雷をだばすることろとべこの
私とまるこうんと又仏のくまで
仏土任城とこるろみ一ぐるんと統めいれまで
くるのまでんと雑幻をまこと言葉すべ一みこと

一刀ふこのたりこあるとも我いよハ母ぎ母。母国母
我とありろ家りよ一ぎ和ぎんぎ
ぎ乳ぎ人ぎ悩ぎむぎこありう御ぎ
一まり孔よのこ〳〵ぬ姫とあこ〳〵ぬ氏と親み一言よ
ろでまるこ申一こんこのれよう
ろ〳〵老まろこ〳〵ぬ嫌をこぐすろられよ
乗とるろくぬ男ろ申一これはれ
ろ老まる申せろろこ
こるりぬ悪こ〳〵ふ大ぬ力と唐〳〵ぬ
ぬろをろぬ言とあるくまぬ私とまぬ
とい〳〵ぬろをこ後一こと言とおぬ

百八町記表四

こゝろざすおのれら世そるそう矢のまゝ
うそんとをゝそゞ
私よいそく来るおう何梅花を拾んとするおう時
孔子そうそ呼て我が乞ひ
まこおう唯とこゝくらうとゝ
此の経おう孔子仰まと一巻をうや物のおゝ
唯と言てや新聞おゝまゝ
をうそれがゆうとゝめんおう
うとうゝおう経うそれそうゝ
めんの人に問答うそく同答おう
同うゝ皆ねへうゝおゝ書像ゝ

中庸よそう矢のまゝおう
○おう人にうそく経おう世まゝよ仏説中一とうゝ悟り経
ひうとうゝおうそうゝ
大学を儒都をそうゝ
露らゞ仏よゝしと祖経おう
つそ性命の法ようひゞうそ
それおやおうそうゝ
ゞうふ同ゞゝ西おそれゞ経
梅をゝこゝ云ゝおそ北も
月早春をおうそう秋をゝ
万民表理当像おゝ仰用の一切うく網おうゝ

のごとく揚朱が巻まよことくその列まんまを泣あらしハ
墨翟が白きいとの染るをかなしむハ仁乃ありさまを
やぶるなんどがそに仁利といふそら揚墨乃仁義をまびらかなん
及ばざハそしまてわが継し仏法大慈悲のこゝろハかんとなる
揚墨が愛ハ溺情おして仏智の愛慈悲乃様もよけいなお
なしかれば聖人のつくく惻隠の仁を仁乃端やとし理をすつ
て仏の愛徳含忍をとくし儒法ハ孝道をたてゝとあらぬ
ぞくを内に虫る仏法ハ外を立る一ろして孝道その内
まで無き見迷乃九夫学者これども此理をゆきてぬする
仏法をそしるか儒者の人ハ仏儒に二親ある猶ま仏法を絶
御是法花経よいはく是法住法位世間相常住とあり又

華厳経よいはく仏法は世間法世間法は仏法とお
まかつるよ仏儒なんぞあるとひ好をむしばむや此理成
あらば好ろこしつまおるむ人ハ好ろき儒まつき五常九
下とつふべし其法まを総者あり其子のいろく民を愛し
国をおさめくる業あらん年ャ生わの御世ハ儒釈をよに
総者あるまぞ総者あまし八忠君孝父ろより古経よ
そく其徳を併せざるハ仏義ひろくまきん由てくるらの釈
迦孝君輔孔丘ハ此其徳をある窮め一とし五行かるが故に二
道の生法ておな回新立して太極の擁化をそゞきしら故よ
儒字ありとひて仏字其字の正理よいてしげんハ汗牛
充棟の儒書をまうく園よおほし子貢乃古人ある一丈宇遂

乃至着る同じう仕立の四五枚ぐらゐ
ずつ絶をそろへて積こむそれを一つ
ゝみの行李とも葛籠ともいふの類
わりとよく入る大概道中そのまゝ
逗留願候ぜんハ力をつけ至てく
ふのもの天ぷらでもむしやうにい
おくり申候事や

私の白ちよあつらへものこと
用うそろへとらせ給ふ事ハ
の所をなぐりの地をねらふ
也一疋ぐけの小ふろしきハ小
刀ハ国綱よあり仕立大きハ
はあり世ろふの和人の又私よ
服といふうら絶裏を縫こむ
仕立をねむいうれハ解文
そつと勘ろよひて編綴し
ませ招ろて或ハ芝居ハ
富ハ招れ葛ハそろ
さわぐその招ぐを招
に生で夏ハまげつま
神ハ浅草ハ蔦の生
乃至ハよろこ三社ハ富ハ

我が主ありとするを
衆と兼子兄弟無事也
同一手わざを以四郎を
倒すべき也

百八町記巻之外終